生協労組おかやまパート部会　学習

核兵器ゼロへの挑戦－Voice＆Action

０９．６．６（土）

岡山県労働者学習協会　長久啓太
ブログ「勉客商売」 http://benkaku.typepad.jp/blog/

一。今年もまた、夏がくる

１。日本の戦争と夏－日本人の戦争体験

◇米軍による本格的な日本本土空襲が開始されたのが１９４４年１１月から

・１９４４年７月のマリアナ諸島・サイパン島の陥落で、本土空襲が可能に

・この時点で戦争の勝敗は誰の目にも明らかであり、無条件降伏すべきだった

・しかし、昭和天皇と戦争指導部は、国体護持のために「もうひと戦果あげてから」と継続指示

・１９４５年２月から、米軍は市街地への焼夷弾による無差別爆撃を開始

・日本人死者の３１０万人のうち、民間人は約８０万人。そのうち約５０万人が日本国内での死者で、ほとんどは、１９４５年の絶望的なたたかいの中で殺された。

◇１９４５年３月１０日の東京大空襲をはじめ､日本の都市への無差別爆撃が行われる

◇４月１日には、米軍の沖縄本島上陸（沖縄戦終結は６月２３日）

◇６月２９日に岡山空襲

◇８月６日広島、９日長崎への原爆投下

◇８月１５日に敗戦

２。同時に、日本の侵略戦争についても私たちは知る必要がある

◇アジアへの侵略戦争（１９３１年～１９４５年）

＊朝鮮と台湾への植民地支配、中国への侵略、東南アジアへの侵略

＊アジアで、日本は２０００万人の命を奪った

＊無差別爆撃、虐殺、捕虜虐待、強制労働、日本軍性奴隷、生体実験、細菌戦・・・

３。労働組合が、なぜ平和運動になぜ取り組むのか

◇それはひと言でいえば､“ 労働組合だから ”

◇労働組合は、基本的人権・ヒューマニズムの担い手

＊「人たるに値する生活」（労働基準法第１条）をもっとも破壊するものが戦争

＊平和のうちに生きることは基本的人権

「われらは、<u>全世界の国民が</u>、ひとしく恐怖と欠乏から免かれ、平和のうちに生存する権利を有することを確認する」（日本国憲法前文）

＊憲法２８条で労働組合が特別な権利を与えられているのは、労働組合への期待

◇人びとの願いと逆行する日本の政治

＊憲法の平和主義を捨て、海外で自衛隊が武力行使できるようにしたい。

◇日本の軍事費は年間約５兆円

＊労働者が生み出した富（お金）が、武器や戦争に使われている

＊米軍への思いやり予算、グァム島への米軍移転費…なんで私たちの税金が？

◇戦争は、最悪の環境破壊

＊エコに反する軍事エネルギー。そして環境破壊。

・イラク戦争開戦直後、イラク領内に展開した米軍が使用した燃料は１日 5.7 万キロリットル。大阪府の１日のＣＯ2 排出量に匹敵。爆弾が発生させるＣＯ2 も。

・軍事関係による年間ＣＯ2 排出量は、年間７．９億トン。これは、排出量６位のドイツを上回る量。兵器は、環境への配慮は二の次で開発されている。

・90 式戦車の燃費はリッター200～300m、戦闘機に至っては、1 分間飛ぶごとに 908ℓの燃料を消費、約 8 時間飛ぶだけで日本人が生涯に排出する CO2 を出す。

・モノと人を破壊し、森林を壊し、汚染物を出す。戦争は最悪の環境破壊。

＊軍事費に使うお金を、環境政策や、医療・福祉・教育にまわせば、どれだけのことができるだろう。どれだけ、人びとの笑顔が増えるだろう。

４。私たちにできること

◇平和活動の難しさー目標と継続性

＊「平和は大事だと思うけれど、何をしたらいいのかわからない」

＊目の前に苦しんでいる人が「いない」ということ

◇１人ではできないことでも、労働組合ならできる

＊平和集会や企画、取り組み

＊署名活動（核兵器を戦後使わせなかったのは、署名と人々の世論の力）

＊学習会、フィールドワーク

二。核兵器ゼロへー被爆者の声（Voice）を聞くことから

１。核兵器廃絶へ、世界が動き出した

◇転機となったオバマ大統領演説（プラハ、４月５日）

①核兵器のない世界をめざすことを、アメリカの国家目標とすると初めて発言。

②広島・長崎への原爆投下への「道義的責任」という立場を初めて述べた。

③「核兵器のない世界」にむけて、諸国民に協力を呼びかけたこと。

◇北朝鮮の核実験で、ますます「核廃絶へ」の議論が活発に

◇来年（2010 年）の 5 月に、NPT（核不拡散条約）再検討会議がニューヨークで

＊核兵器の廃絶へ向けての具体化が議題の大きなひとつ

＊5 月 2 日に大集会・デモを予定、世界の圧倒的世論で各国政府に核廃絶を迫る

＊日本の運動は、それまでに「核兵器のない世界を」署名を集め、提出する予定

◇しかし、日本政府は「核抑止論」に固執（4 月 27 日、中曽根外務大臣講演など）

＊世界の逆流をいく被爆国の政府。今年の選挙で変わってもらうしかない。

私たちは、核兵器廃絶のために、なにをすべきか。

原爆とはどういう兵器なのか。そのことをまず学びます。

２。広島・長崎の悲劇ーどういう人たちの上に落とされたか
◇街の中心部をねらって（資料①②③）
◇３分の２は、子ども・女性・お年寄りという、まったくの非戦闘員
◇広島・長崎では、日本人だけでなく、多くの外国人も被爆している
＊「人間の上に人間が落とした」（井上ひさし）

３。死の放射線ー猛烈な核分裂反応により、中性子の矢がつきささる（資料④）
◇１００万分の１秒ー原爆が炸裂する前

「爆心地にいた人々は、１００万分の１秒に発せられる最初の中性子から、それを避けることなく浴びました。そこにいた人は、いわゆる爆風とか熱戦とか閃光がなかったとしても、全員が亡くなっていたであろうと推定されるわけです。誰１人避けることはできなかったのです」
（『原爆投下・１０秒の衝撃』NHK 出版より、広島電機大学葉佐井博士の話）

４。火球の出現ー閃光と熱線（資料⑤）

「一瞬、目も眩むような閃光、あっと思った瞬間、思わず左後方上空を見た私の目に、黄色とも、橙色ともいえない火の玉を見た。左の顔面に熱い！ と手をやったとき、暖かい風に吹きあげられ、身体が浮き上がって、右前方に走るようにのけぞり倒れた。その距離は５、６メートルはあるだろう。そこまでは覚えていた」
（高野眞さん、当時２７歳ー爆心地から南東へ２キロ、比治山）

◇広島原爆の「火球」－３秒間の巨大なエネルギー放出
＊１００万分の１秒までに、爆弾内部の温度は２５０万度。原爆が炸裂、火球出現。
＊１００万分の１５秒、温度は４０万度。太陽の７０倍近い高温。火球の直径は２０メートル。
＊０．２秒後、火球は直径３１０メートルに膨張。最も大きく、明るく見える瞬間。この時間から、２秒までの間に熱線の９０％が放出される。大量のガンマ線が放出され、空気と反応して紫色に見える。
＊熱線は地上に突き刺さり、瞬時にあらゆるものを焼いた（溶かした）。爆心地に近い人ほど、この熱線による火傷の被害が甚大だった。爆心直下の場合、その温度は１千数百度～２千度以上になったと予想される。

５。衝撃波の広がり
◇３秒から１０秒のあいだに、広島市街は破壊された
＊衝撃波は、音速以上の速さで、中心部から広がった。爆発の３秒後に１．５キロ、７．２秒後に３キロ、１０．１秒後に４キロの地点に到達したと予測される。

６。爆心地の人たちの「死」について
◇「人間」と「人間らしい死」を、原爆は否定した
＊「あの日」亡くなった人で、家族に看取られながら死ぬことができた人は、わずか４％。遺族は、肉親の最期のときをさまざまに想像して苦しみ続けている。

＊長崎の爆心地から北方 700 メートルにある山里小学校の防空壕の中で被爆した少年の回想。「運動場のいちめんに、人間がまいてあるみたいだった。運動場の土がみえぬくらい倒れていた。たいていは死んでしまって、動かなかった」。

＊広島の詩人峠三吉は、愛らしい女学生の死を「にんげんから遠いものにされはててしまって」とうたい（資料⑥）、「にんげんをかえせ」と叫んだ。

◇広島での建物疎開（空襲に備えての道路拡張）学童の悲劇

＊作業中に被爆、殺された学徒は約 6000 人。
爆心地付近（現在の平和公園一帯）では、
９校、約 2,000 名が全滅。戦争推進のための「総動員」の悲劇でもある。

＊いったいどんな「死」だったのか。遺族の苦しみ。

「新大橋（爆心から約 600m－長久）のあたりに行くと、全身火傷で水を求めうごめいている中学生、女学生。倒れたまま、『おじさん、水をちょうだい』とあちこちから呼びかける声。だれがだれやら、親兄弟が見ても見分けがつかないだろう。真っ黒に焼けた唇は、ぷうと大きくふくれあがり、顔が腫れ、目がつぶれ、わずかに開いているばかり。あたりにはシャベル、鍬、バケツ、救急袋、弁当箱などが散乱していた。何百という無数の死体だった。橋の上、橋の下にもごろごろと人が転がっている。巨大な瀬川倉庫は倒壊していて紅蓮（ぐれん－猛火の炎のたとえ）の炎があがっていた」（６日夕方。小川春蔵さん＜当時３３歳＞の証言）

三。被爆者の「心の傷」を追って

１。被爆者の記憶の障害－見ているのに、見ていない

◇「あの日」の記憶の欠損

「見ても見えないという現象は、いきなり襲った『恐怖・驚愕』、想像することさえできなかった事態の出現（一瞬にして消えたまち、大量の異形の死体）に対する自我防衛反応と考えられる。それは本能にのみしたがった逃避行動であり、視角入力の拒否である。これらを通常のごとく入力していたのでは、身がもたないからである。このメカニズムはほかの『不意打ち・大災害』でもおこっている」

（『ヒバクシャの心の傷を追って』中澤正夫、岩波書店、2007 年）

２。「見捨て体験」と「見ても感じない（感情麻痺）」－自責感、自己査定

◇証言から（資料⑦）

「自責感をともなう鮮明な記憶は、いくら経っても封印されることはなく、逆に強化される。それは相対化されることを拒むきわめて『個人的なもの』となり、その結果、さらに被爆者を苦しめ続けるという悪循環におちいっていく」（前掲書）

「軽傷で余力のある人が大量の死体を見、運び、名前も確認せず焼き、うめる。非日常的な光景である。日常的な弔いにつきものの、情感の高まりをもっていては作業できない。死者に個人を感じない、人間を感じない、『麻痺状態』でなくてはできない。その意味で、感情麻痺も本能的に作動した自我防衛機制といえる。喜怒哀楽を感じるメカニズムにバリアを張ってしまったのである。それでもあとになって『モノのように扱ったこと』『何にも感じなかったこと』は、人間として許されないと、被爆者の心に深い傷として刻印されていくのである」（前掲書）

３。いまなお続く、引き戻らされ体験

◇フラッシュバック

＊ちょっとしたキッカケで、「あの日」の状況が、恐怖と自律神経症状をともなって脳裏に再現してしまう。場所、音、光、臭い。

◇「体験を語る」ことは、強烈な「引き戻らされ」のキッカケとなる。

◇病気になること－「いつ配達されてくるかわからぬ死を待つ人」

＊原爆症の苦しみ－現在「原爆症認定訴訟」裁判が全国でたたかわれている。各地裁、東京・大阪高裁で 18 連勝中。

◇サイレント・マジョリティ（沈黙の多数者）

＊広島にて被爆した元軍医、肥田舜太郎氏によると、いつでも求められれば自分の被爆体験を語れる人は、数千人のレベルであろうという。これは、被爆者の５％ほど。

＊いまも自分が「被爆者である」ことを語れないは、40～50％といわれている。

＊原爆と自分を対峙させることにより、反原爆の思想を育てていく人も多い。それらの人が被爆者運動を引っ張り、核兵器廃絶のたたかいに立ち向かっている。しかし、そこまで踏み切ることがどんなに困難なことかを、私たちは忘れてはならない。

＊サイレント・マジョリティ、いまも原爆のことを語れない人たちの中にこそ、「心の被害」の本質がある。

◇被爆者には今、「生き残ったことの意味」を問う意識が生まれているという

さいごに：被爆者の声（Voice）を聞き、自分にできる行動（Action）を
「核兵器のない世界」を、次の世代の子どもたちに手渡すために